

雛の間にねむる蒲団を竝べけり

藤田湘子

床の間に雛段がしつらえられて緋毛氈の赤が華やぐ。夕刻になると雪洞が灯され、白酒やあられに興じた昼の賑わいがうそのように静まり返る。幼い姉妹が眠る蒲団が二つ並べられ眠りにつくと、灯を消した部屋の中で、雛人形達が目を覚まし踊り出すのではないか・・・と、童話のような情景を思い浮かべた。

ところが、雛段の前に床を敷いたのは、どうやら湘子らしいのである。湘子は人形が苦手。生きているのかも知れぬ、と思ってしまうとか。いざ寝ようとして、電燈を消した後、一斉に見られている恰好で落ち着かないと随筆『俳句好日』に書いている。女ばかりの家族の中の家長としての湘子と雛との関係が思われて興味深い。

1983年 (558作) 第六句集『一個』 鑑賞・野本京